

追検査

令和三年度 学力検査問題

国語

(九時二十五分～十時十五分)
(五十分間)

受検番号 第 番

注 意

- 1 解答用紙について
 - (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
 - (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄かど二か所に受検番号を書きなさい。
 - (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
 - (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
 - (5) 解答用紙の※印は集計のためのもので、解答には関係ありません。
 - 2 問題用紙について
 - (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
 - (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十四ページです。
- 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(26点)

東京の高校に通う高校二年生の美緒は、岩手県で羊毛を手織りで加工する工房を営む祖父を訪ねた。そこで美緒は、祖父に頼まれて大量の荷物を台車で運ぶの手伝うことになった。

① 祖父が発送する荷物は大量のスプーンだった。長年、日本と世界のさまざまな土地に行くたびにこつこつ集めてきたもので、木材や金属などでつくられたものが一本ずつ仕切られたケースに整然と納まっていた。

「いつかこのコレクションを持って旅に出ようと思っていた。」

銀色のスプーンをクロスで磨きながら、祖父が笑った。

「路上に絨毯を敷いて、さじをずらりと並べて買ってもらおうかと。興味を持った人には来歴を披露する。どこの産か、どうやって手にいれたか、どこが魅力か。のんびり客と話をしながら、さじの行商をするんだ。」

「荷物運びとかからない？ そしたら、私もすみっこにいる。」

「体力的にもう無理だな。一度ぐらいやってみてもよかった。」

祖父が今度は木製のスプーンを布で拭いた。素朴な木目をいかしたスプーンで、コーンスープやシチューをすくって食べたらいいそうさ。

「でも、良い落ち着き先が見つかったんだ。若い友人が料理屋を開くので、彼女に譲る。好きなきを客が選んで食事をする仕組みにしよう。」

鉦物に本、絨毯や織物。他にも祖父が集めているものはたくさんある。染め場の奥にはエアコンで常に温度と湿度の管理をしているコレクション用の部屋があるほどだ。

「どうしてスプーンを集めたの？」

「口当たりの良さを追求したかったのと、あとはバランスだな。良い職人が削ったさじは軽くて美しい。手に持ったときのバランスが気持ちいいんだ。そのさじで食事をする軽やかでな。天上の食べものを口に行っている気分になる。同じことは私たちの仕事にも言える。」

「スプーンと布って、全然別物っぽく思えるけど……。」

祖父が手を止めると、奥の部屋に歩いていった。すぐに戻ってくると、手には紺色のジャケットを抱えていた。生地はホームスパンだ。

「おじいちゃんのがジャケット？」

③ 「そうだ。おばあちゃんが織ったものだ。持ってごらん。」
渡されたジャケットは、見た目よりうんと軽く感じた。

「あれ？ 軽いね。」

「それでもダウンジャケットにくらべると若干重いかな。」

ジャケットを羽織ってみるようにと祖父がすすめた。

袖に腕を通したとたん、「あれ？」と再び声が出た。手で感じた重量が身体に伝わってこない。肩にも背中にも重みがかからず、着心地がたいそう軽やかだ。それなのに服に守られている安心感がある。

「手で持ったときより、うんと軽い。」

「手紡ぎ、手織りの糸は空気をたくさんはらむから軽くて温かい。身体に触れる布の感触が柔らかいから、着心地が軽快になる。さじにかぎらず、良い職人の仕事は調和と均衡が取れていて心地よいいんだ。音楽で言えば。」

「ハーモニ―？ もしかして。」

「そうだ、よくわかったな。」

「私、中学からずっと合唱部に入ってたの。」

祖父にジャケットを返すと、慈しむようにして大きな手が生地を撫でた。

「美緒は音楽が好きなんだな。」

あらためて考えると、合唱はそれほど好きでもなかった。

熱心に部に勧誘されたことが嬉しかった。合唱部はみんな仲が良さそうに見えたから、その輪に入っていると安心できただけだ。

「部活、そんなに好きじゃなかったかも。なんか……私って本当に駄目だな。」

ジャケットを傍らに置くと、祖父がスプーンの梱包作業に戻った。

「この間、汚毛を洗っただろう？ どうだった？ ずいぶんフンをいやがっていたが。」

「臭いと思ったけど、洗い上がりを見たら気分が上がった。真っ白でフカフカしてて。いいかも、って思った。汚毛、好きかも。」

そうだろう、と祖父が面白そうに言った。

④「美緒も似たようなものだ。自分の性分について考えるのは良いことだが、悪いところばかりを見るのは、汚毛のフンばかり見ると同じことだ。」

祖父が何を言い出したのかわからず、美緒は作業の手を止める。赤い漆塗りのスプーンを取り、祖父が軽く振る。

「腹を壊す。それほどの繊細さがある。良いも悪いもない。駄目でもない。そういう性分が自分のなかにある。ただ、それだけだ。それが許せないと責めるより、一度、丁寧に自分の全体を洗ってみて、その性分を活かす方向を考えたらどうだ？」

「活かすって？ どういうこと？ そんなのできるわけないよ。」

「そうだろうか？ 繊細な性分は、人の気持ちのあやをすくいとれる。ものごとを注意深く見られるし、集中すれば思わぬ力を発揮することもある。へこみとは、逆から見れば突出した場所だ。悪い所ばかり見ていないで、自分の良い点も探してみたらどうだ？」

「ない。そんなの。」

「即答だな。」

祖父がスプーンに目を落とす。

「だって、ないから。自分のことだから、よくわかってる。」

それは本当か、と祖父が声を強めた。

「本当に自分のことを知っているか？ 何が好きだ？ どんな色、どんな感触、どんな味や音、香りが好きだ。何をするとお前の心は喜ぶ？ 心の底からわくわくするものは何だ。」

「待って。そんなの急にいっぱい聞かれても。」

「ほら、何も知らない。いやなところなら、いくらでもあげられるのに。」

からかうような祖父の口調に、美緒は顔をしかめる。

「そんなしなめ面をししないで、自分はどんな『好き』でできているのか探して、身体の中も外もそれで満たしてみろ。」

「好きなことばかりしてたら駄目にならない？ 苦手なことは鍛えて克服しないと……。」

「なら聞くが。責めてばかりで向上したのか？ 鍛えたつもりが壊れてしまった。それがお前の腹じゃないのか。大事なもののための我慢は自分を磨く。ただ、つらいだけの我慢は命が削られていくだけだ。」

祖父がテーブルに並べたスプーンを指差した。

「手始めに、気に入ったさじがあったら、それで食事をしてみる。良いさじで食物を口に運ぶ感触をとことん味わってごらん。」

「えっ、でも……。」

戸惑いながらも梱包していないスプーンと、コレクションが納まった箱を美緒は一つずつ見る。祖父が集めたものは、どれも色や形が美しい。そしておそらく外見のほかにも祖父の心をとらえた何かがある――。しだいに興味がわいてきて、次々とスプーンが入った箱を開けて見る。

木材、金属、動物の角。さまざまな材質のスプーンを持ったあと、最後に残った箱を開けた。赤や黒、赤紫色に塗られた木製のスプーンが出てきた。

無地もあるが、金箔などで模様を描かれたものや、虹色に輝く装飾が施されているものもある。

一本、一本見ていくなかで、シンプルな黒塗りのスプーンに心惹かれた。手にすると、スプーン先から柄に向かつて、真珠色の光が走った。

「おじいちゃん、これはうるし？」

祖父はうなずいた。

「これがいい、これが好き。おじいちゃん、このスプーンをください。」

「美緒はこれが好きか。どうしてこれを選んだ？」

「直感？ 何かいい感じ。」

⑤ 祖父の目がやさしげにゆるんだ。

ほめられているような眼差しに心が弾み、黒いスプーンを見る。

幼い頃、壁にかかった視力検査表で視力を調べられたことがある。

黒いスプーンを右目に当て、おどけてみた。

「視力検査……。」

一瞬、不審そうな顔をしたが、祖父はすぐに横を向いた。口もとに軽くこぶしを当てて、笑っている。

おどけた自分が猛烈に恥ずかしくなり、美緒はスプーンを握った手を膝に置く。

たいして面白くもないだろうに、祖父は目を細めてまだ笑っていた。

伊吹有喜著『雲を紡ぐ』文芸春秋社による。
一部省略がある。

(注) ※ホームスパン……糸の太い手織りの毛織物。

問1 祖父が発送する荷物は大量のスプーンだった。とありますが、祖父が、これらをどのようにしようとしているかを説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 大量のスプーンを持ち運ぶのは体力的に難しいので、良いものを厳選して、持てる分だけ美緒に持たせて旅行に出ようとしている。

イ 大量のスプーンを持ち運んでの行商はできそうにないが、客が好みのものを選ぶ仕組みの料理屋を開く友人に譲ろうとしている。

ウ 大量のスプーンを並べて、興味を持った人には、どうやって手にいれたかなど、スプーンについて話しながら行商をしようとしている。

エ 大量のスプーンをクロスで磨き、常に温度と湿度の管理をするコレクション用の部屋に保管して、家族に披露しようとしている。

問2 同じことは私たちの仕事にも言える。とありますが、スプーンを作る仕事と織物を作る仕事の共通点を、祖父がどのように考えているか、次のようにまとめました。空欄Ⅰ、Ⅱにあてはまる言葉を七字で、空欄Ⅰ、Ⅱにあてはまる言葉を五字で、本文中からそれぞれ書き抜きなさい。(6点)

スプーンも織物も、	Ⅰ	であれば、音楽のハーモニーのように	Ⅱ
が取れていて、使う人にとって心地よいものだという点で同じことだと考えている。			

問3 そうだ。おばあちゃんが織ったものだ。持ってた。とありますが、ここで美緒に渡したものを、祖父が大切に扱っている様子が最もよく表れている一文を、本文中から探し、最初の五字を書きなさい。(5点)

問4 美緒も似たようなものだ。とありますが、ここでの美緒に対する祖父の考えとして、最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 美緒の繊細な性分しょうぶんから、自分の悪いところにはかり目が行きがちだが、羊でさえも人間の気持ちのあやをすくいとれる、繊細な心の生き物だと知ってほしいということ。

イ 美緒の繊細な性分は、注意深さや集中力につながっており、細かい作業に向いているので、汚毛を洗ってフカフカにする工程をたくさん経験してほしいということ。

ウ 美緒の繊細な性分は、人の気持ちのあやをすくいとれるなどの良い点があり、それを見ないのは、汚毛のフンばかり見ると同じだと気づいてほしいということ。

エ 美緒の繊細な性分については、良いも悪いもなく、同じように汚毛も活かす部分と捨てる部分があるので、少しでも羊毛を活用できるようにしてほしいということ。

問5 祖父の目がやさしげにゆるんだ。とありますが、これは祖父が、美緒の様子をどのように感じていたからですか。次の空欄にあてはまる内容を、興味、好きの二つの言葉を使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(7点)

	自分の良い点はないと即答していた美緒が、	
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
	から。	

2 次の各問いに答えなさい。(24点)

問1 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)

- (1) 曖昧な答えを繰り返す。
- (2) 地域ぐるみで湧水地の環境を保全する。
- (3) 今もなお廃れることがない名曲。
- (4) 各国のシユノウが一堂に会する。
- (5) 説明の一部を図表でオギナう。

問2 次の――部と――部の文節の関係について、あとの文の――部と――部の文節の関係が同じものを、ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

少数数の グループで 積極的に テーマについて 話し合う。

- ア 時間の経過とともに夕闇が深まっていった。
- イ いよいよ彼の出発する日が近づいてきた。
- ウ 学校には近所に住んでいる友だちと通った。
- エ あの人は誠実で素直な心をもった人物だ。

問3 次の——部の品詞が他と異なっているものを、ア～オの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

私は今日のできごとを、決して忘れることはないだろう。ずいぶん長く練習してきた技をついに成功させることができたのだ。この感覚が残っているうちに、もっと先の段階まで進めてみることにしよう。

問4 中学生のAさんたちが、インタビューした内容を記事にまとめる学習を行いました。次の

【資料】と、インタビューの様子を読んで、あとの問いに答えなさい。

【資料】

令和○年度 △□中学校生徒会の活動	
活動の内容	活動報告
生徒会の運営	定例会の実施。各委員会と連携して、スムーズに行うことができた。
生徒会新聞 アンケート 生徒会意見箱	発行回数を増やして積極的に情報を発信した。 アンケート調査を定期的実施した。 生徒の意見を募るための生徒会意見箱を設置した。
ランチミーティング	給食の時間や昼休みを利用して、生徒会役員で、意見交換などを行った。新企画のアイデアを募った。

インタビューの様子

Aさん「【資料】をみると、生徒会では、『生徒会意見箱を設置した』とありますが、設置した場所と設置した数を教えてくださいませんか。」

生徒会長「生徒会意見箱は、校内に六か所設置されています。北校舎の一階から四階までの廊下に一つずつ。そして南校舎の二階と三階の廊下に一つずつです。」

Aさん「ありがとうございます。では、生徒会意見箱は今のくらい使われていますか。」
生徒会長「どのくらい使われているかというのは、どういう意味でしょうか。」

Aさん「生徒会意見箱に、どのような意見がどのくらい寄せられたのか。また、それらの意見が生徒会の活動にどう反映されているのか、ということですか。」

生徒会長「はい、よくわかりました。今年度の四月から七月までに届いた意見の総数は三十二通で、一番多かった意見は『あいさつ運動をもっと盛り上げたい』というものでした。ご意見を参考に、生活委員会と連携して十一月には、あいさつ週間を計画しています。」

Aさん「私自身も生徒会意見箱を利用したことがあるのですが、生徒会の皆さんにきちんと声が届いているのか不安だったので、安心しました。」

生徒会長「生徒会意見箱のご意見に対する返答をどういう形で行うのがよいかというのは、生徒会の課題の一つです。これからは、生徒会新聞に、いただいた意見への返答コーナーを作ろうと考えています。」

～インタビューが続く～

(1) Aさんのインタビューの進め方について述べた文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア なぜそうなったのかという理由を質問することで、相手の思考を促している。

イ 「はい」「いいえ」という形で答える選択型の質問を中心に話を進めている。

ウ 場所や数などの具体的な質問から始め、さらに質問をして理解を深めている。

エ 相手からの質問に対して、反論を交えながら論理的に説得しようとしている。

(2) Aさんは、インタビューの内容などから、次の文を作りました。空欄 I にあてはまる言葉を、インタビューの様子の中から探し、七字で書き抜きなさい。(3点)

生徒会に届いた意見が、生徒会の活動に

I

ことがわかった。

(3) Aさんは、これらの学習を通じて、日本語の特徴について次のような感想をもちました。空欄 II にあてはまる言葉を、感想の内容が正しくなるように、【資料】の中から探し、三字で書き抜きなさい。(2点)

私は、インタビュー記事を作成しているときに、日本語の言葉の成り立ちについて、国語の時間に学習した内容を思い出しました。

生徒会の【資料】では、名詞には、「運営」「委員会」といった漢語が多くあるのですが、中には「アイデア」という外来語の名詞や、II という和語の名詞がありました。他にも名詞には、外来語と漢語を組み合わせた「アンケート調査」のように、混種語といわれる言葉もありました。

こうした言葉の特徴やその場にふさわしい表現について、もっと知りたいです。

一九世紀の末から二〇世紀の初頭にかけて活躍したイサドラ・ダンカンとは、芸術的なダンスと言えればバレエしか存在しなかった時代に、のちにモダンダンスと呼ばれる新しい表現様式の登場を準備したダンサーである。観客の一人は、ダンカンの踊りを見てみると「まるで私自身が、その舞台上で踊っているかに思えた」と言う。観客は、舞台上のダンサーと一緒に踊っている。いや、より正確に言えば、舞台にいるのが自分自身に思えた、というのである。もちろん、本人は舞台にはおらず、狭い座席に腰を掛けているにもかかわらず。

観客とは、目の前のプレイヤーの運動に同調し、共鳴し、さらには自分がそのプレイをおこなっているかと錯覚したり、それによって自分の表現の衝動を解放したりする者なのである。なるほど、^①観客とはそうしてプレイヤーを〈鏡〉のように扱うのである。

スポーツの観客にも同じことが言えよう。例えば「人及び動物の表情について」(一八七二)の中でダーウィンは、先と同様の〈鏡〉の性格を、芸術のみならずスポーツにおいても見出そうとしている。「人前に立った歌手が突然ちよつとしゃがれ声になると、その場にいる人たちの多くが咳払いするのが聞こえることがある。(……)また跳躍の試合で選手が飛ぶと、観客の多くは(……)足を動かすという話も聞いた」。けれども、その足がプレイヤーと同じように宙高く浮かすわけではない。観客はスタジアムの座席あるいはテレビの前に座り、小さく曲げた足を小さくピクつかせる。〈鏡〉と言っても、観客の身体がプレイヤーの身体と形態的な対称性を帯びているわけではない。それでも観客は、フィギュアスケートを見ながら、軌道を追うように跳躍の瞬間にアゴを上げ、着地の瞬間にアゴを下げる。選手が着地に失敗したら、自分が転んでしまったかのように、(外見上微弱な動きであったとしても)ずっこけてしまう。観客の身体はそうして、プレイヤーの身体につられ、同化し、運動する。プレイヤーを見つめながら、まるで自分が運動しているかのよう錯覚し、そうして「私自身の表現したい衝動」を解放するのが観客というものである。

こうした「つられ」の事象は、西洋の人文的思考の歴史の中では優美と関連することとして頻繁に論じられてきた。アンリ・ベルクソンは「時間と自由」(一八八九)で「われわれはダンサーがとらうとしている姿態をほとんど見通しているので、彼が実際にその姿態をとるとき、彼はわれわれに従っているように見える」とし、ダンサーと観客との間に、先述のダンカンを見つめる女性が述べたのと同様の共感的関係があることを指摘している。そうしたことが可能なのは、ここでは優美の感情を観客の内に喚起させる自由自在な運動が発生するからであり、自由自在な運動は次にどんな動きが生まれるかを見る者に予見させるからである。自由自在で、ゆえに観客に予見を促すダンサーの運動は、リズムを生み、それが「糸」のように伸びると「その糸によってわれわれはこの想像の世界のあやつり人形をあやつっているかのよう」になる。この想像上の「あやつり人形」説が面白いのは、プレイヤーと同化している観客の身体はプレイヤーと必ずしもぴったり同じ動きをしていくわけではないという先に述べた問題に、ひとつの解決を与えてくれるからである。観客は、自分の身体そのものというよりは想像上の「あやつり人形」を運動させているのである。観客は、プレイヤーの運動のリズムを感じ取りながら、想像上の「あやつり人形」とともにプレイヤーの運動と同調する。そういう仕方では観客は、ダンサーと一緒に踊り、選手と一緒にプレイしている、そう考えることができる。

ならばさらにこう考えられよう。ダンサーとは、^③自らの身体運動を通して、観客との間にこの「あやつり人形」を生み出す存在である。観客はその誘いに乗せられて、この人形とともにダンサー

と踊る。舞踏やコンセプトチュアルなダンスの動きは優美とは限らない。しかし、あえて優美の流れを失速させたり、優美を反省的に意識させたりする方法は、優美との関係を何らか保持していると考ええるべきである。ダンスに限らず、身体をメディアにする表現のほとんどは、そうした誘惑の仕掛けをその身体運動に内包しているものである。

④ スポーツの身体も観客を誘惑する。選手の運動に夢中な観客は、ダンサーの場合と同じように「あやつり人形」をこしらえ、運動させるだろう。とはいえ、ダンサーの場合とは異なり、スポーツの身体は観客の誘惑を第一に意図しているわけではない。スポーツの身体は試合の状況に完全に没入しており、観客を乗せようとする余裕はない(例外的に、走り幅跳びなどで、手拍子を求め、観客に乗せてもらう依頼をする選手はいる)。だからこそ、観客は試合に集中したプレイヤーの身体に熱中し、プレイヤーの動作に自らの心を容易く没入させてしまうのである。それに比べると、ダンサーの意図は観客を乗せること以外にはない。このことは優美を奪う原因となりうる。あからさまに自分を乗せようと乗りを促してくる振る舞いに、観客は醒めてしまうものだからである。

「どんな些細な動きもそれ独自の意味がある」と歌う《マダム・シエリー》を挙げながら、モダンダンスは動きのヴォキャブラリーを整備することで既存の舞踊芸術であるバレエ以上に「より深く、より広い、より適切な意味を伝達する目的のため」に創造されたと、テッド・シヨーンは説いた。

⑤ さて、その伝達はどうか。モダンダンスの作家や批評家たちは、人は五感に頼らずして自分の身体の重さや動作を知覚できるキネステジア(運動感覚)を有しており、これがダンサーと観客のコミュニケーションを橋渡しすると考えていた。キネステジアは、レモンを齧る人を見て、まるで自分が酸味を味わっているかのように顔をしかめるといった移し替えを可能にするし、さらにこうしたことと類似の連鎖が、ダンサーの身体と観客の身体の間を生じるといっているのである。あくびはあくびを、笑いは笑いを誘う。重い建造物を支える円柱に対してさえ、私たちは自分の経験を円柱に置き移し、それが過度の重圧に耐えているかのように感じ、私たちはその重さを自分のことのように感じてしまう。批評家ジョン・マーティンは、こうした自他の移し替えの能力を「内的模倣」と呼んだ。ダンカンは、内的模倣を引き起こすような創造的なダンスを生むには、「あらゆる動きの中心となるスプリング、モーター・パワーのわき出すところ、あらゆる動きの流れが生み出される統一体」が必要であると考えた。この「統一体」は意図を超えた自動性を伴うがゆえに「モーター」と呼ばれ、とくにその在り処を彼女は身体のみぞおちあたりに位置する太陽神経叢に探し求め、この考えはロシアの俳優・演出家スタニスラフスキーに刺激を与えた。意図を帯びた動きを回避し、身体が勝手に動き出す心身の状態なくして、ダンスも演劇も観客に内的模倣を引き起こすことはできない。そうした「同化」の思想が二〇世紀前半の舞台芸術を牽引したのである。

(中尾拓哉編「スポーツ／アート」により、「運動を見るといふ運動 スポーツと芸術の観客身体論序説」〔木村覚執筆〕による。一部省略がある。)

(注) ※優美……上品で美しいこと。

※コンセプトチュアルなダンス……概念的な表現によるダンスのこと。

※メディア……手段。媒体。

※ヴォキャブラリー……語彙。ここでは特定の範囲の中での表現方法のこと。

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)(12点)

南都に、齒取る唐人有りき。ある在家人の、^①慳貪にして、^②利養を先とし、事に触れて、
 齒^{あきん}心のみにありて、徳もありけるが、虫の食^くひたる齒を取らせむとて、唐人がもとに行きぬ。
 損得を考ふる心

齒一つ取るには、[※]銭二文に定めたるを、「一文にて取りてたべ。」と云ふ。
 抜いてください

少分の事なれば、ただも取るべけれども、心様の憎^{にく}さに、「ふつと、一文にては取らじ。」と云ふ。
 ただでも抜くことは出来るけれども 絶対に、一文では抜くまい

③ やや久しく論ずる程に、おほかた取らざりければ、「さらば三文にて、齒二つ取り給へ。」とて、
 全く抜かなかつたので それならば

虫も食はぬに良き齒を取り添へて、二つ取らせて、三文取らせつ。

心には利分とこそ思ひけれども、疵なき齒を失ひぬる、大きな損なり。

此は申すに及ばず、大きに愚かなる事、をこがましきわざなり。

〔「沙石集」による。〕

(注) ※唐人……唐の国から渡来した人。

※在家人……出家していない人。

※銭二文……二文のお金。文はお金の単位。

問1 ① 食^くひたる齒^はとありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、すべてひらがなで書きなさい。(3点)

問2 ② 取らせむの主語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 唐人 イ 在家人 ウ 虫 エ 作者

問3 ③ やや久しく論ずるとありますが、このとき唐人と在家人が論じていたことを、次のようにまとめました。空欄にあてはまる内容を、十字以内で書きなさい。(3点)

を下げるかどうかということ。

問4 本文の内容を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 損得を考えることも度を越してしまつては、よい結果にはつながらない。
- イ 健康は何よりも大切なことなので、全財産を失つてでも治療する必要がある。
- ウ 損得を考えることも時には重要だが、頼まれたことだけを行うべきである。
- エ 損得を考えることを優先し、相手を見て料金を決めるのはよくないことだ。

5 次の資料は、文化庁が示している「言葉によって円滑に伝え合うための手掛かり」の四つの項目をまとめたものです。

国語の授業で、この資料を用いて「スピーチにおいて大切なこと」について話し合うことになりました。地域の人たちに学校を紹介するスピーチをする際に、あなたが最も重視することを資料の四つの項目の中から一つ選び、「スピーチにおいて大切なこと」について、あとの（注意）に従って、あなたの考えを書きなさい。（12点）



（注意）

- (1) 二段落構成とし、第一段落では、あなたが資料の中から選んだ一つの項目とそれを選んだ理由を、第二段落では、第一段落の内容に関連させて、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえてあなたの考えを書くこと。
- (2) 文章は、十一行以上、十三行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

（以上で問題は終わりです。）

